

東洋文庫所蔵本に押捺された蔵書印について（十）

—幕臣・藩士の蔵書印—

中善寺 慎

既刊連載目次

- 一 朝鮮本に押捺された朝鮮の蔵書家の蔵書印 書報 35号
- 二 僧侶・寺院の蔵書印、附神官・神社の蔵書印（上） 書報 36号
- 三 僧侶・寺院の蔵書印、附神官・神社の蔵書印（下） 書報 37号
- 四 国学者の蔵書印（上） 書報 38号
- 五 国学者の蔵書印（下） 書報 39号
- 六 漢学者・漢詩人の蔵書印 書報 40号
- 七 学校・教育機関の蔵書印 書報 41号
- 八 医家・本草家の蔵書印 書報 42号

凡 例

- ・ 印影は縮尺任意の単色写真である。
 - ・ 印文の縦の寸法をミリメートルの数字で掲げた。
 - ・ 複数の資料に該当蔵書印を見い出せるものは、印影を採集した資料名に*印を付した。
 - ・ 資料名につづけて、請求記号を丸括弧に包んで付した。
 - ・ 蔵書家の伝記などは主として次の資料に依った。
 - 市古貞次「ほか」編『国書人名辞典』
 - 家臣人名事典編纂委員会編『三百藩家臣人名事典』
 - 井上宗雄「ほか」編『日本古典籍書誌学辞典』
 - 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』
 - 国立国会図書館編『人と蔵書と蔵書印』
- ・ 配列は、印記所有者のよみの五十音順とした。



浅野梅堂（一八一六—一八八〇）

幕末明治初年の好事家。幕臣。文化十三年（一八一六）幕臣浅野内記長泰（号は錦谷）の男として江戸飯田町に生まれる。名は長祚。字は胤卿。幼名は金之助。号は蔣漂潭。斎号は漱芳閣・五万卷楼・柏洪楼・靈均堂。池香・蔣漂・蝦侶と号したが、致仕後の梅堂をもって知られている。叙任して中務少輔・和泉守・備前守。天保十年（一八三九）初出仕。甲府勤番支配・浦賀奉行・京都町奉行などを歴任、文久二年（一八六二）に江戸町奉行となる。三千五百石を領す。慶応三年（一八六七）致仕して向島白鬚祠畔に隠居、詩文や書画に没頭した。詩文を友野霞舟に、書を杉浦西涯に学ぶ。画ははじめ栗本翠庵につき、のち椿椿山の門人となる。多くの書画を収集し、その鑑識に秀でた。また目録学にも通じ宋元版など漢籍貴重書の収集に見識を示した。祖父長富・父長泰と同様、蔵書を以て聞こえ、『漱芳閣宋元槧五山版山口本朝鮮版旧鈔本略目』を遺している。明治十三年（一八八〇）向島に没し、東京谷中天王寺内安立院に葬られる。

〔浅野源氏五万卷楼図書之記〕（32）

『寛永行幸記』（三・A・g・二）

〔漱芳閣鑑藏印〕（36）

『新彫改併五音集韻』（XI・二・二四）

〔漱芳閣清賞〕（17）

『新彫改併五音集韻』（XI・二・二四）

〔梅堂経眼〕（18）

『新彫改併五音集韻』（XI・二・二四）

伊佐岑満（一八二一—一八九二）

江戸時代末期の幕臣。文化八年（二八一）に生まれる。名は岑満。新次郎と称す。号は如是。文政六年（一八二三）幕府金同心見習となる。以後、諸役を歴任する。安政元年（一八五四）下田奉行支配組頭となり、翌年アメリカ人ロジャー・スト下田で会談、老中宛書簡を受け取る。さらに海軍奉行並支配組頭・留守居支配組頭・用心並などの諸役を経て、明治元年（一八六八）には静岡に移り使番となる。明治九年（一八七六）榛原郡初倉村牧之原東照宮畔に住んだ。岡本況斎に漢唐古注を学び、仏典に兼通、和歌を能くす。書法を小島成斎に受け、草書に最も巧みであった。明治二十四年（一八九一）没。静岡県榛原郡初倉村坂本法林寺に葬る。

「人中分陀利華」(31)

『延寿撮要』(三十一)





大久保忠寄（？—一八〇一）

江戸時代中期の幕臣。生年不詳、一説に享保十七年（一七三二）幕臣大久保忠真の男に生まれる。名は忠寄。通称は内匠・靱負・一郎右衛門。号は西山。宝暦十三年（一七六三）西丸書院番となり、安永四年（一七七五）家督を相続。寛政元年（一七八九）致仕。同五年（一七九三）將軍徳川家斉より文庫補修の料として金百両を賜り、家蔵書籍の目録を献じた。東京文理科大学（現筑波大学）にその蔵書目録が蔵される。享和元年（一八〇一）没。墓は江戸青山教学院。

『愛岳麓蔵書』（59）

* 『帝鑑図説』（三・A・ii・一〇）

『南畝叢書』（II-1-B-10-11）



大沢基孝（生没年不詳）

江戸時代中期の幕臣。宝暦七年（一七五七）家督を相続、安永五年（一七七六）高家に列し、侍従、下野守に叙任された。大沢基清（元文五年没）の孫。

「大沢侍従兼下野守藏書」（41）『風土記』（三二頁一〇一―一〇五）



大田南畝（一七四九—一八二三）

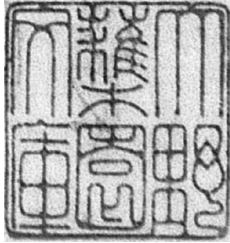
江戸時代中期の幕臣。文人・学者。寛延二年（一七四九）幕府御徒大田吉左衛門正智の長男として江戸牛込仲御徒土町に生まれる。名は覃。字は子粗。通称は直次郎・七左衛門。南畝はその号。ほかに四方赤良・蜀山人・杏花園・杏園・寢惚先生・牛門外史など。明和二年（一七六五）家督相続。学問を志して内山賀邸・松崎観海に師事した。明和四年（一七六七）に『寢惚先生文集』を出版、一躍文名を挙げ、以来江戸の新興文芸界に活躍する。寛政六年（一七九四）学問吟味で首席。支配勘定に昇進して『孝義録』の編纂、勘定所古記録の取調などに従事する。享和元年（一八〇一）大坂銅座出役、文化元年（一八〇四）長崎奉行所出役。文政六年（一八二三）没。江戸小石川の本念寺に葬られる。蔵書は約二万冊。蔵書目録『南畝文庫蔵書目』が伝わる。硬軟の両面に涉るが、とりわけ記録・地理・名物類が目立つ。没後間もなく蔵書の散逸が始まり、安政期までには殆どが売尽くされたという。『孝義録編集御用簿』は南畝自筆本。「大田氏蔵書」印は「南畝文庫」印を併用することが多い。

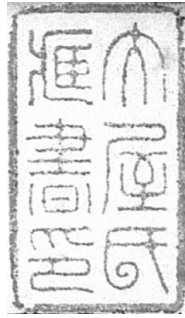
- 〔杏園〕(21) 『孝義録編集御用簿』(三H-a-19)
 - 〔大田氏蔵書〕(41) 『「きうの水かかみ」』(三A-d-5)
 - 〔南/畝〕(29) 『江戸図鑑綱目』(三H-d-12)
 - 〔南畝文庫〕(27) 『「きうの水かかみ」』(三A-d-5)
- * 『孝義録編集御用簿』(三H-a-19)

大野広城（一七八八―一八四二）

江戸時代中期の幕臣。国学者。天明八年（一七八八）生まれ。名は広城。通称は権之丞。号は忍軒・忍屋隠士・忍辱舎・忍廻屋・樵園など。幕府小十人組に所属。早くから国学に志し清水浜臣の門に入る。特に法制・武家故実に詳しく、語学・風俗にも造詣があつた。著書『殿居囊』『青標紙』『泰平年表』などが幕府の禁書処分を受け、天保十二年（一八四一）綾部藩主九鬼家御預けの身となり、幽囚のうちに病没。墓は丹波綾部西福院。物語類に関心を寄せ歌集も遺している。

「大野樵園文庫」(31) 『万葉問答』(VII-21K-171)





大屋愷 敬（一八三九—一九〇一）

幕末明治初年の洋学者。加賀国金沢藩士。天保十年（一八三九）金沢藩士石沢水満の長男として金沢城下に生まれる。名は子郎。通称は武一郎。暁山・岸舟と号す。鹿田文平（一八一五—一八七二）の門人。京都に遊学し傍ら岸岱に画を学ぶ。帰国後、藩主より大屋姓を賜る。安政六年（一八五九）藩命により長崎に遊学。慶応元年（一八六五）藩の壮猶館翻訳方。慶応二年砲台築造方、大小砲製造所絵図方兼務となる。以後、鉄砲局承事等を歴任し金沢藩有数の洋学者として活躍した。明治三年（一八七〇）教育界に転じ、翌年に金沢県文学教師となる。夙に普通教育の普及に志し、『公益英倭字典』（一八七四）を完成させたほか、『金沢名数』、『加賀能登越中各地誌略』などを著わす。明治三十四年（一九〇一）没。

『大屋氏蔵書印』（42） 『世説新語』（XI—A—c—二六）

岡谷繁実（一八三五―一九二〇）

幕末の上野国館林藩士。天保六年（一八三五）出羽国山形藩中老岡谷嘉兵衛繁正の男として山形に生まれる。名は繁実。通称は鈕吉。号は寒香園。変名斯波純一郎、斯波弾正、天民。弘化二年（一八四五）主家の移封に従い上野館林に移り、同四年家督を継ぐ。水戸の青山延光に学び、昌平黌にも学ぶ。馬廻給人として初出仕し、使番、大目付、中老を務める。勤王家として活動したが、元治政変後に幕府の嫌疑を晴らすため蟄居を命ぜられ、のち放逐された。維新後、内務省図書助・修史館御用掛・氷川神社宮司などを歴任。著書に『名将言行録』『館林藩史料』などがある。大正九年（一九二〇）没。墓は埼玉県深谷市萱場清心寺。足利学校・金沢文庫の再興に尽力する。

〔寒香園文庫〕（27）『百家琦行伝』（X―五―Lee―一〇四七）

〔岡谷藏書〕（36）『百家琦行伝』（X―五―Lee―一〇四七）



小田切春江（二八一〇—一八八八）

幕末の尾張国名古屋藩士。画家。文化七年（二八一〇）名古屋藩士小田切松三郎の長男として生まれる。名は忠近。通称は伝之丞。号は春江・歌月庵・喜笑。天保九年（二八三八）家督を継ぐ。馬廻・大番組・書院番を歴任。初め高力種信に画法を学び、森高雅に彩色法を学ぶ。種信の書物の副本を描き、また自らも貸本屋向けに数種の稿本を書いている。藩命により「尾張志」「美濃志」の絵図等を作成。退隠後は神職を経て名古屋博物館付属員となる。古代の模様・図案を研究。著書に『奈留美加多』等がある。明治二十一年（二八八八）没。墓は名古屋高岳院。蔵書印ではないが、ここにまとめて掲げた。



「歌月庵」(21) 『絵本暴風の夢』(三|G|b|四四)

「歌月庵(小)」(17) 『名陽見聞図会』(三|H|a|ほ|二七)

「喜／笑」(07) * 『勢幾登婦賀記』(X|五|I|一|〇|一六)

『名陽見聞図会』(三|H|a|ほ|二七)

『琉球画誌』(三|H|a|ほ|二九)

「源忠近印」(21) 『名陽見聞図会』(三|H|a|ほ|二七)



「小田切氏」(15)

* 『尾張年中行事略絵抄』(三―H―a―ほ―二五)

『尾張名陽図会』(三―H―c―に―三二)

「小田切氏(大)」(22)

* 『名陽見聞図会』(三―H―a―ほ―二七)

『琉球画誌』(三―H―a―ほ―二九)

『尾張名陽図会』(三―H―c―に―三二)

「忠近(大)」(22)

『絵本暴風の夢』(三―G―b―四四)

「忠近(小)」(15)

* 『尾張年中行事略絵抄』(三―H―a―ほ―二五)

『尾張名陽図会』(三―H―c―に―三二)

「忠近(中)」(16)

『名陽見聞図会』(三―H―a―ほ―二七)

小田切盛徳（？―一八八五）

江戸時代後期の出羽国米沢藩士。藩儒。明治維新後は新政府に出仕、東京府に在住した。明治五年（一八七二）工部省中録、翌年には中田憲信らとともに司法大録を任じ、明治九年には司法権少丞となる。この間に江藤新平主宰の民法編纂会議の書記官を勤めた。明治十年（一八七七）元老院御用掛、明治十八年（一八八五）元老院少書記官に進み、この年に病没。主家上杉家の相談人を長く務め、米沢出身の子弟に対する教育に心を砕いた。慶応四年（一八六八）出生の長男万寿之助は明治大正時代の外交官・銀行家で、東洋文庫初代監事。「盛徳」印は万寿之助旧藏書中に捺されていたもの。盛徳旧藏の明治初期法制関係資料九七〇冊は、昭和七年（一九三二）万寿之助により慶應義塾大学図書館に寄贈されている。

「盛徳」(14)

『群書一覽』(II-1-A-1-095)



小野高潔（一七四七—一八二九）

江戸時代後期の国学者・本草家。延享四年（一七四七）小野高尚の男として江戸に生まれる。本姓は平。名は高成・高潔。通称は幾之助・斎宮。号は探頤堂・反古亭・玄々亭・有隣軒・三近舎・竹叢・佚泰子・牛隱・東山・五樹亭。天明四年（一七八四）家督を継ぎ幕府小普請方となり、寛政三年（二七九一）致仕。歌人石野広通の妹の子。国学に造詣が深く、制度・文物を研究し、本草にも通じた。文政十二年（一八二九）没。江戸牛込の松源寺に葬られる（寺の移転に伴い現在は東京中野上高田）。

〔重波文庫〕（34）

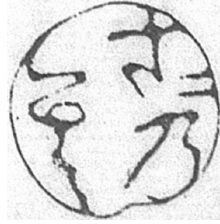
『柿本社神位記』（IV―四―D―四五）



小原君雄（一七五二—一八三五）

江戸時代後期の近江国彦根藩士。国学者。宝暦二年（一七五二）彦根藩勘定方中尾維寧の男に生まれる。名は君雄。字は子飛。通称は八郎左衛門・春平。号は鷓鴣舎・篠舎・梅月舎。初め比叡山縁珠院・嵯峨二尊院に預けられ詠歌を学ぶ。明和四年（一七六七）彦根に戻り、旗宰領小原宗貞の嗣となる。大菅中養父に学び和歌と国学を修めた。寛政十一年（一七九九）藩校稽古館の和学寮御用掛となり、命により本居宣長に入門、また芝山持豊に学ぶ。文政六年（一八二三）騎馬徒士。国学・詠歌・書を能くし、また武芸に長じ特に槍術に秀でた。『篠屋集』『彦根歌集』がある。天保六年（一八三五）没。墓は彦根大雲寺。

「*ok*、乃屋」(28) 『燈下雜記』(II-1-E-1096)



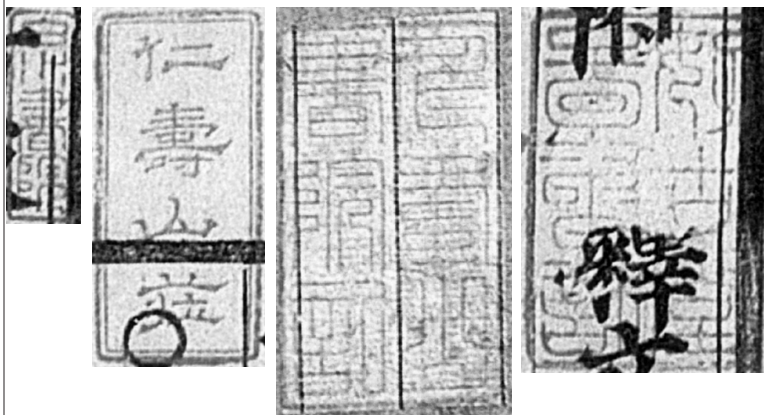
勝海舟（一八二三—一八九九）

幕末明治期の政治家。文政六年（一八二三）旗本勝小吉（夢酔）の長男として江戸本所亀沢町に生まれる。名は義邦。字は安芳。通称は麟太郎・安房。号は海舟・飛川。島田虎之助に剣術を、永井青涯に蘭学を学ぶ。天保九年（一八三八）家督相続。開明的な幕臣であり、近代海軍の創始者として著名。文事にも多趣味であった。万延元年（一八六〇）咸臨丸を指揮して渡米。元治元年（一八六四）海軍奉行・安房守となる。明治維新の後は新政府に参画。明治五年（一八七二）海軍大輔、翌年に海軍卿・参議、明治二十一年（一八八八）枢密顧問官。著書に『開国起原』『吹塵録』等がある。海舟遺書は一時南葵文庫に収められたがその後分散した。明治三十二年（一八九九）没。東京府荏原郡馬込村南千束に葬る。



「勝安芳」(30)

『高麗史』(XI一六〇C一—二)



河合道臣（一七六七—一八四一）

江戸時代後期の播磨国姫路藩の家老。明和四年（二七六七）姫路藩家老河合宗見の男に生まれる。諱ははじめ鼎、のち主君酒井忠道の偏諱をうけて道臣という。幼名は猪之吉。字は漢年。通称は隼之助（介）。号は白水・竹墩・蘭窩・墨水・寸翁。天明七年（一七八七）家督を相続。藩老に列せられ、姫路藩の財政改革に事蹟をあげた。文政四年（一八二一）飾東郡阿保村（姫路市兼田）の拝領山屋敷に仁寿山学問所を設立し、諸方の学者を招いて藩字の一翼を期した。齋号仁寿山荘。詩歌を能くし茶道にも通じた。天保十二年（一八四一）没。播磨飾磨郡糸引村仁寿山梅ヶ岡の河合家墓所に葬る。道臣没後の天保十三年（一八四二）仁寿山巒は医学部門を残して姫路藩藩校の好古堂に吸収合併された。その際に蔵書は二分され、明治四年（一八七一）にはそれぞれ飾磨県庁と飾磨県立古学館へ引き継がれたが、間もなく多くが散逸したといわれている。

〔好古堂図書記〕（46）

〔大慧普覚禪師武庫附雪堂行和尚拾遺録〕（二一B—b—四五）

* 〔新板大字附音釈文千字文註〕（二一B—d—一四）

〔仁寿山書院記〕（51）

〔大慧普覚禪師武庫附雪堂行和尚拾遺録〕（二一B—b—四五）

〔仁寿山荘〕（46）

〔大慧普覚禪師武庫附雪堂行和尚拾遺録〕（二一B—b—四五）

* 〔新板大字附音釈文千字文註〕（二一B—d—一四）

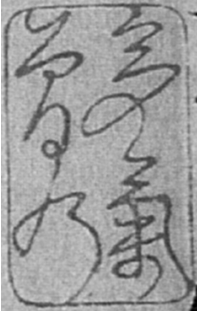
〔白水書院〕（27）

〔新板大字附音釈文千字文註〕（二一B—d—一四）



貴志孫太夫（一七八五—一八五七）

江戸時代末期の幕臣。天明五年（一七八五）旗本貴志忠以の子として江戸に生まれる。名は鏡之丞のち忠美。通称は弥三郎、孫太夫。鳳居・朝暎・竹園などと号した。小納戸を経て、嘉永三年（一八五〇）に目付、同六年（一八五三）から駿府町奉行を勤め、安政四年（一八五七）駿府に没する。安倍郡千代田村沓谷の長源院に葬る。絵が巧みで本草にも造詣が深く、蘭学にも関心があった。愛知県西尾市の岩瀬文庫には本草書が多数残っている。東京中野上高田の保善寺は、貴志家代々の菩提寺である。



- 「永存家蔵」(38)『ブチャーチン軍艦図巻』(I—II—E—三四)
- 「貴志文庫」(51)『ブチャーチン軍艦図巻』(I—II—E—三四)
- 「多氣曾乃」(39)『ブチャーチン軍艦図巻』(I—II—E—三四)

木原盾臣（一八〇五―一八六八）

江戸時代後期の肥後国熊本藩士。国学者。文化二年（一八

〇五）藩士木原元福の長男として熊本城下三軒町に生まれる。

本姓は藤原。名は真足・盾臣。通称は英太・盾太。号は藤園。

長瀬真幸・林有通に国典を学び、有職故実に通じ遺跡遺物に

関心を持っていた。御座敷支配・御櫓番を勤める。天保三年

（一八三二）以後たびたび江戸に赴き、伴信友・高島千春ら

と親交した。『古兵器図解』等を著わす。藩の特技である犬

追い物に堪能で、その関係の書物を多く蔵したという。慶応

四年（一八六八）没。墓は熊本長延寺。

東洋文庫岩崎文庫中に『古兵器図解』の自筆稿本がある
（五―G―一）。

「藤園」(24)

『日本国風』(III―1―12)



木村黙老（一七七四—一八五六）

江戸時代後期の讃岐国高松藩の家老。安永三年（一七七四）藩家老木村季明の長男明辰の男として生まれる。名は通明。

字は伯亮。号は桃溪・黙老・黙々漁隱・訥言斎・頼翁・烏有山人・痴斎・樟川。巨と称す。幼名熊次郎、後に与総右衛門と改める。藩学講道館で岡井赤城らに学ぶ。学際拔群、また画も能くし、かたわら剣法も究めた。文化十年（一八一三）

家督相続。文政六年（一八二三）第九代藩主松平頼恕の家老となる。その博識は藩の内外に響き、和漢の学芸に博通していたのみならず、当時の俗文学にも精通し戯作や歌舞伎についての記録考証を著述している。江戸在任中に滝沢馬琴と交友したほか、殿村篠斎・小津桂窓らとも親交があった。蔵書家としても知られる。筆まめで自筆本・写本が多い。嘉永五年（一八五二）隠居、安政三年（一八五六）没。高松城西の西芳寺山下（のち峰山墓地）に葬る。

『木村蔵書』（57） * 『我衣』（II—1—E—1—〇二四）

『日本風土記（兩浙兵制鈔出）』（II—1—N—1—八〇三）



高力種信（一七五六―一八三一）

江戸時代後期の尾張国名古屋藩士。随筆作者。宝暦六年（一七五六）生まれ。名は種信。通称は新蔵（新三）・与左衛門。号は猿猴庵・艶好・艶香庵。天明五年（一七八五）初出仕、馬廻組を命ぜられる。翌年、江戸へ赴き江戸詰を勤める。寛政四年（一七九二）より大番組となり、文化四年（一八〇七）馬廻組に戻る。画を能くし、社寺を参詣して法会・開帳などを写生、また天変地異・奇事などを描き、滑稽本などの戯作にも手を染めた。多数の稿本を遺す。多くは「大惣」の貸本として流布した。門下に小田切春江がいる。天保二年（一八三一）没。墓は名古屋総見寺。蔵書印ではないが、ここにまとめて掲げた。

「猿猴庵」（15）

『絵本富加美草』（三―D―b―二八）

『文化六巳於信仰院善光寺開帳』（三―G―b―五七）

『文化二乙丑甚目寺開帳図会』（三―G―b―五九）

『猿猴庵合集』（三―G―b―六〇）

*『馬之塔図会』（三―H―a―は―二六）





「高力」(11)

* 『文化六巳於信仰院善光寺開帳』(三D b 二八)

『繪本音聞山』(三G b 五七)

『文化二乙丑甚目寺開帳図会』(三G b 五九)

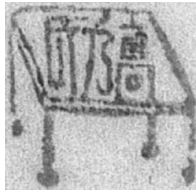
『猿猴庵合集』(三G b 六〇)

『桜見に春の日置』(三G b 六五)

『尾張年中行事略絵抄』(三H a 一五)

『馬之塔図会』(三H a 一六)

『続梵天図会』(三H a 一八)



「高力氏」(24)

* 『享和元西年大須天満宮開扉』(三G b 五七)

『文化二乙丑甚目寺開帳図会』(三G b 五九)

『猿猴庵合集』(三G b 六〇)

『続梵天図会』(三H a 一八)

『繪本富加美草』(三D b 二八)

『繪本音聞山』(三G b 五七)

『桜見に春の日置』(三G b 六五)

『尾張年中行事略絵抄』(三H a 一五)

『馬之塔図会』(三H a 一六)

* 『続梵天図会』(三H a 一八)

『繪本富加美草』(三D b 二八)

* 『続梵天図会』(三H a 一八)



「種信」(11)

「種信(丸印)」(13)



古賀謹一郎（一八一六—一八八四）

江戸時代末期の幕臣。儒学者、洋学者。文化十三年（一八一六）幕府儒官古賀侗庵の男として江戸昌平黌の官舎に生まれる。本姓は劉。名は増。字は如川。通称は謹（欽）一郎。号は謹堂・茶溪・沙蟲・沙翁・憂天生。幼少より家学である儒を学ぶ。弘化三年（一八四六）小姓組から儒者見習となる。洋学にも志し蘭学にも通じた。外国使節応接掛として外交にも関与。安政二年（一八五五）洋学所頭取となり、文久二年（一八六二）昌平黌学事に転ずる。製鉄奉行・目付などを歴任。慶応三年（一八六七）従五位下、筑後守。明治元年（一八六八）静岡に移住以後は世に出ず明治政府には仕官しなかつた。のち東京に戻り、晩年は典籍を侶とした。明治十七年（一八八四）浅草向柳原の自宅で病没。墓は東京大塚の先儒墓地。著書に『度日閑言』等がある。印は、自筆稿本の序に捺されていたもの。



〔卯金刀商〕（23）

〔茶谿〕（20）

〔腐儒謹堂〕（23）

〔書笈〕（Ⅱ—Ⅰ—E—1—〇七四）

〔書笈〕（Ⅱ—Ⅰ—E—1—〇七四）

〔書笈〕（Ⅱ—Ⅰ—E—1—〇七四）

近藤正斎（一七七一一一八二九）

江戸時代後期の幕臣。北方探検家、書誌学者。明和八年（一七七七）幕府御先手組与力近藤守知の三子として江戸駒込雞声ヶ窪に生まれる。名は守重。字は子厚。通称は吉藏・重藏。号は正斎・昇真人・擁書城。山本北山に漢学を学び多芸多才、天明七年（一七八七）朋友と白山義塾を開く。寛政二年（一七九〇）兄多病のため家督を相続。寛政七年（一七九五）より長崎奉行出役・支配勘定方・松前蝦夷地御用を歴任。文化五年（一八〇八）書物奉行に進み、紅葉山文庫の書籍を精査し貴重書の来歴を考証するなど書誌学上の多大な業績を挙げた。また、藏書家としても知られ、数百巻の古書籍を蒐集して滝川文庫を設立した。文政四年（一八二二）大坂弓奉行を不行跡のため免ぜられ、同九年（一八二六）長男富藏の殺傷事件により改易。近江大溝藩預かりとなり、文政十二年（一八二九）病没。墓は近江高島郡瑞雲院。江戸駒込西善寺に墓標がある。



「正斎藏」（46）

『睡余小録』（II—1—E—1—〇三六）



三田葆光（一八二五—一九〇七）

幕末明治期の歌人。幕臣。文政八年生まれ。名は、初め礼本、のち喜六・葆光。通称は伊右衛門・伊兵衛。号は櫛園・箕麓。函館奉行支配組頭として蝦夷開拓に従事。文久元年（一八六一）向山黄村に随従して欧米を巡る。維新後は、神祇省教部小吏を勤め、一時お茶の水女学校に奉職。小林歌城・黒川真頼・仲田顕忠に師事し、和歌・茶道に余生を送った。著に『櫛紅葉』等。明治四十年（一九〇七）没。

「葆光書記」（24）『通俗唐玄宗軍談』（VII—F—四四）



新見正路（一七九一—一八四八）

江戸時代後期の幕臣。歌人。寛政三年（一七九二）幕臣新見正澄の男に生まれる。本姓は源。名は正路。字は義卿。通称は吉次郎。号は賜萱・茅山。御小納戸・御使番・目付などを歴任し、文政十二年（一八二九）大坂西町奉行、天保二年（一八三一）江戸に戻り西丸御小姓組番頭格御用御取次見習となる。漢字歌字に通じ、蔵書家と知られ、九段坂下の邸内に賜萱文庫を設けた。中に宋元旧版・古鈔本の多いことは編著『賜萱書院儲蔵志』によって知られる。嘉永元年（一八四八）没。牛込原町の願正寺に葬られた（のち同寺の移転に伴い中野上高田に改葬）。旧蔵の宋刊本五部は養子正興が幕府へ献じて現在書院部に伝存するが、その他の蔵書は四散。

「賜萱文庫」(54)

『吾妻鏡』(三―A―g―1―1)

「賜萱文庫(大)」(72)*『参考保元物語』(X―五―D―1―二八)

『参考平家物語』(X―五―D―1―二八)



高橋景保（一七八五—一八二九）

江戸時代中期の天文家。幕臣。天明五年（一七八五）天文方高橋至時の長男として大坂で生まれる。名は景保。字は子昌。通称は作助・作左衛門。号は観巢・玉岡・求己堂主人・蛮蕪。寛政九年（一七九七）江戸に出て父に天文学暦学を学ぶ。享保四年（一八〇四）父の後を継ぎ天文方となる。以後、御書物奉行・天文方筆頭を務めた。地誌学・蘭学に長じ、地図の作成や翻訳に従事した。満洲語研究の業績も多い。幕命により文化七年（一八一〇）『新訂万国輿地全図』を完成。文政九年（一八二六）参府したシーボルトと交わり、国禁の日本図を贈ったことが発覚。文政十二年（一八二九）獄中に病死。蔵書は没収され、国書・漢籍は昌平齋に、洋書は蕃書調所などに移された。墓は江戸浅草源空寺。

〔求己堂記〕（17）

〔尺度考〕（XIII—五—D—一〇）

高橋富兄（一八二五—一九一四）

幕末明治期の国学者。加賀国金沢藩士。文政八年（一八二五）高橋富有の男に生まれる。名は富季・富兄。通称は肇・日理。号は梅園・古学舎。田中躬之に国学を学び、音韻学に精通した。嘉永五年（一八五二）藩校明倫堂の皇学講師となり、明治維新後も第四高等学校教授などの教職にあった。和歌を好み、明治後半には金沢歌壇の中心的人物であった。大正三年（一九一四）没。墓は金沢市野田山共有墓地。

〔高橋〕（22）

『廓寿賀書』（VII—Fie—四）





田丸直暢（生没年不詳）

江戸時代後期の幕臣。本草家。生没年不詳。名は直暢。通称は六蔵。号は寒泉・靈槐・寒水。江戸小石川に住し緒鞭会の同人。設楽貞丈の勧めで博物学を学ぶ。佐橋節翁・浅香青洲・飯室昌栩らと交友があつた。

「寒泉園」(46)

『花彙』(XV | 三 | B | b | 五九)

* 『啓蒙禽譜』(三 | J | a | ろ | 六八)

中神守節（一七六六—一八二四）

江戸時代中期の幕臣。明和三年（一七六六）幕臣中神守孝の男に生まれる。名は守節。字は君度。通称は順次（順治、順次郎とも）。号は梅籠園。坂光淳・内山淳時に就いて和学を修める。学問は該博で特に地誌研究にすぐれた。大田南畝の門人。天明四年（一七八四）家督を相続し徒士となる。寛政六年（一七九四）聖堂に入り、『寛政重修諸家譜』『天寛日記』『新編武蔵風土記稿』の編纂に関わる。享保三年（一八〇三）徒目付、文化三年（一八〇六）学問所勤番組頭となる。文政七年（一八二四）没。墓は江戸駒込吉祥寺中の洞泉寺。著書に『歌林一枝』のほか『慶長年間江戸図考』『隅田川考』などがある。

『中神蔵書』（26）

『歌林一枝』（二一F一a一—一）





中川忠英（一七五三—一八三〇）

江戸時代中期の幕臣。宝暦三年（一七五三）御書院番中川忠易の五男として江戸に生まれる。名は忠英。字は士雄。通称は重三郎・牛五郎・馬五郎・勘三郎。号は駿台。後に飛騨守と称した。明和四年（一七六七）家督相続。安永六年（一七七七）小普請組組頭、天明八年（一七八八）目付となり、寛政七年（一七九五）長崎奉行に任ぜられ飛騨守従二位下に任ぜられた。寛政九年（一七九七）勘定奉行兼関東郡代。大目付等を経て旗奉行となる。文政十三年（一八三〇）没。浅草東本願寺別院墓地に葬られる。『清俗紀聞』の監修者として知られる。蔵書は孫の忠潔により幕府に献上され、内閣文庫に伝わる。地図類の所蔵が多いという。



〔中川〕（14） 『徒然草寿命院抄』（三―A―d―三〇）

〔中川家蔵書印〕（67） 『徒然草寿命院抄』（三―A―d―三〇）

〔中川蔵書〕（15） 『唐本類書考』（II―I―A―1010）

長沢伴雄（一八〇八—一八五九）

江戸時代後期の紀伊国和歌山藩士。国学者、歌人。文化五年（一八〇八）和歌山藩士吉岡利右衛門義知の次男に生まれる。名は伴雄・友雄。幼名は十蔵。通称は隼人・貫一郎・衛門。号は絡石舎・柿園・白木翁・清廻家・靱の家・葛之軒。文政五年（一八二二）富樫広蔭に入門、のち本居春庭・大平に学び、加納諸平と交流があった。天保二年（一八三二）長沢政寛の養子となり、経済・有職を学ぶ。嘉永六年（一八五三）罪を得て諸役を免ぜられ蟄居。安政六年（一八五九）獄中にて自刃する。墓は和歌山護念寺。

〔長沢蔵書〕（32）

『山城名勝志』（XI—五—B—三四）



西原梭江（一七六一—一八四四）

江戸時代後期の筑後国柳川藩士。国学者。宝暦十一年（一七六一）柳川藩士西原種正の男に生まれる。名は公和のち公助。通称は半三郎・六弥太・新右衛門・一輔・一甫。号は南野（埜とも）・梭江・松蘿山人・耽奇・兔園会。用人助役・小姓格・御城使・留守居用人などを歴任。安永二年（一七七三）藩主立花鑑通の世子鑑門の諸稽古指南となる。文政四年（一八二二）隠居。西原晁樹の門人。文事に秀で滝沢馬琴らと耽奇会を催し、朋誠堂喜三と親交があった。書画・茶道・華道に通じ、多芸多能で好古の癖があった。文化十二年（一八一五）幕府より譴責を受け江戸屋敷内に謹慎。文政八年（一八二五）江戸を離れ帰柳。天保十五年（一八四四）柳川に没す。



『松蘿館書画記』（38） 『花彙』（XV 三B—b—五九）

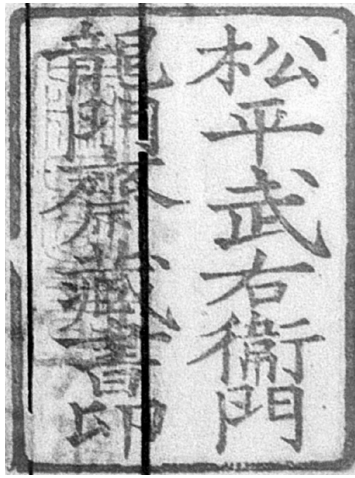
本間百里（一七四八—一八五四）

江戸時代後期の陸奥国一関藩士。有職故実家。天明四年（一七四八）本間住順の長男に生まれる。本姓は源。名は百里。字は伯震。通称は与一・与市。号は梅軒。寛政十年（一七九八）近習として出仕。文化六年（一八〇九）藩主の命により江戸へ出る。故実を松岡辰方に学び、辰方の『職文図会』を増補した。かたわら高倉流の束帯衣紋も修めた。持明院家の入木道・郢曲の免許を受け、中山・三条・久我等の諸公卿家に入りして斯道の研鑽に努めた。文化十三年（一八一六）姓を八幡に改める。著書に『服飾図解』『尚古鎧色一覽』など。嘉永七年（一八五四）没。芝高輪東禅寺に葬る。

〔本間文庫〕（50）

『新編鎌倉志』（XI—五—C—七五）





松平久中（一七七三—一八三九）

江戸時代後期の出羽国庄内藩家老。安永二年（一七七三）庄内藩家老酒井吉之丞（了知）の次男として生まれる。名は久中。通称は嘉七郎。号は子道・龍門斎。組頭松平武右衛門久長の養子となる。家督相続して、寛政九年（一七九七）組頭、文化十年（一八一三）中老に進む。訴訟問題で一時免職するが、のち許されて文化十三年（一八一六）亀ヶ崎城代、天保五年（一八三四）家老に任ぜられた。天保十年（一八三九）没。鶴岡大督寺に葬られる。

「松平武右衛門龍門齋藏書印」（61）

『左伝』（I-161B-1813）

水野忠央（一八一四—一八六五）

江戸時代後期の紀伊国和歌山藩付家老。文化十一年（一八一四）新宮城主水野忠啓の男として江戸に生まれる。名は忠央。幼名は鍵吉。通称は藤四郎。大炊頭と称す。号は丹鶴・黄菊寿園・鶴峯・聚景斎。従五位下、土佐守。天保六年（一八三五）家督を相続。嘉永五年（一八五二）藩主徳川治宝が没すると、藩の権力を掌握して辣腕を振るう。和学所・蘭学所を創設し文武を奨励した。自らも学問を好み、国史・有職故実などの稀覯書などを集め、『丹鶴叢書』を編纂・刊行した。江戸藩邸に原町御土蔵、南御土蔵、乾御土蔵の書物倉があり、下屋敷に設けられた丹鶴書院の蔵書数は約七千余部と伝えられる。万延元年（一八六〇）桜田門外の変を機に、幕府から新宮謹慎を命ぜられる。元治二年（一八六五）病没。新宮城南の本広寺（和歌山県新宮市）に葬られる。

〔新宮城書蔵〕（83）

* 〔天運紹統〕（XI 四一B—一四）

〔選集抄〕（三—A—b—五六）

〔袋草紙〕（三—F—a—へ—六三）





最上義薄（一七六五―？）

江戸時代後期の名家。明和二年（一七六五）最上義郷の男に生まれる。名は義薄。通称は岩之丞。天明八年（一七八八）家督を継ぐ。最上家は室町時代に羽州探題となった足利一族で、のち戦国大名として君臨したが、江戸時代になると近江一万石に移封され、ついで名家となった。

「最上屋形藏書」（49） 『桂林漫録』（II―I―E―I―三三七）



横山致堂（一七八九—一八三六）

江戸時代後期の加賀国金沢藩家老。寛政元年（一七八九）

横山政寛の男に生まれる。名は政孝・孝誼。字は誼夫。幼名

は小五郎、のち多門。通称は蔵人・図書。号は致堂・海棠園

主・蓮湖長翁。享和元年（一八〇一）家督相続。文化十三年

（一八一六）藩の参政となり、以来江戸への使者を六度務め、

世子前田斉泰の傅役に就いた。武芸に長じ、文雅の道にもす

ぐれ特に詩を能くし、古賀侗庵・大窪詩仏らと親交があった。

天保七年（一八三六）江戸藩邸にて没す。墓は金沢猷珠寺。

〔致堂図書〕（33）

〔陽谷先生集〕（XI—四—B—四四）

* 〔秉燭譚〕（II—1—E—1—153）